

小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー

尾上 明代

2 . 船出

このマガジンの連載では、被虐待児たちへのドラマセラピー治療について、読者の皆さんに伝わるのが少しでもあればと希望しつつ、ある児童養護施設で継続的に行ったセッションのプロセスを記述している。本稿では、理論的な説明等よりも、一つのグループの具体的な事例ストーリーを読むことを通して、ドラマセラピーという「対人援助」法について知っていただければと思う。

(事例に出てくる登場人物は、すべて仮名であり、プライバシーを守るために状況などは一部変えてあるが、本質的には実際におきたことが正確に伝わるように描写する。また各子どもの家庭状況と合わせて、その子どもの即興ドラマを考察すると、その意味がより良く理解できるのだが、それらの記述も割愛する。)

ある年の晩秋、A 児童養護施設で10人の子どもたちに3回の「お試し」セッションを行った。虐待その他、さまざまな「育児困難」という理由で施設での共同生活を

強いられている、傷ついた小さな「怪獣」たちが、個性豊かなドラマの中で、多くの強い感情を表現してくれたことは、前回の創刊号で書かせて頂いた。

その後、施設側が、より必要性の高いクライアント・5人を選び、正式に連続セッションが開始されたのは、翌年の春。二週間に一度、夕食後の19時から21時、施設敷地内の別棟にあるホールで行うことになった。

主に、私が開発した「受容とミラーイングの即興ドラマ」という手法を用いてワークを行う。セッション後は、子どもが興奮して眠れない、などということが起きないように、収束プロセスを通常以上に念入りとする目的として、毎回お菓子を食べながら、紙芝居を見せてあげることに決める。全員の気持ちが落ち着いたことを確認してから、それぞれの部屋に帰すことにした。

選ばれたメンバーは、小学校中学年の5人である。

マツオ君

お試しセッションでは、他人に受け入れられることを自分に許せないようで、私と向き合ってドラマを演じることができなかった。でも、ほんの少しずつ自分を表現できるようになって、職員にも甘えられるようになった。前回くれた手紙に、私への思いやりが感じられた。

スギオ君

お試しセッションには参加していない。マツオ君と行動パターンが似ている。二人は喧嘩もするが、基本的にはとても仲が良い。言語表現が苦手であることも手伝って、私には照れてほとんど直接話しかけてこない。が、私の持ち物を隠したりする方法で、多めにアプローチしてくる。つらい家庭生活を経ていることを、あまり感じさせない。素直で穏やかな雰囲気がある瞳を持っていて、彼の生まれ持った幸運の一つだと思った。

イチゴちゃん

お試しセッションで、地球一怖いお父さんとのドラマを行ったが、最後は家族と一緒に眠るハッピーエンドを作ることができた。その反面、怒りや悲しい気持ちも素直に表現できる。5人の中でドラマを演じることに一番向いていると感じた。日焼けした肌、スリムで軽く活発な動きが印象的。

リンゴちゃん

お試しセッションでは、「普通のお母さんとのドラマ」や「世界一・爆発するほど怖い施設の先生とのドラマ」を行った。3回のセッションで少しずつドラマに、そして私に慣れて、気分も落ち着いてきている。イチゴちゃんと対照的に色白で丸顔。おっとりタイプ。言語表現は苦手だが、職員や私に甘えることはできる。

アンズちゃん

お試しセッションには不参加。少なくとも表面的には、はっきりものを言うし、友だちとの喧嘩にも負けない強さがあるように見える。しかし私に対して、またドラマセラピーに対しても一番警戒していて、心をひらいてくれそうもない様子である。ほとんど口をきいてくれない。大人を冷静に観察している。いたづらっぽくて、少女マンガのようにキラキラしている瞳が印象的。

* * *
* * *

演劇青年で施設の職員でもある浩二さんを助手にして、船頭である私は、5人の「怪獣」を7人乗りの小さな船に乗せた。どのようなルートでどこに行き着くのだろうか・・・という以前に、そもそも沖に出られるのだろうか。海岸付近ですでに大波がうねっていたことが、お試しセッションで「観測」されている。しかし、とにかく出帆しなければ、どこにも行けない。

この5人の子どもたちとの出会い・交流は、私のドラマセラピスト人生史上、かなり大きな意味をもつことになるという予感がする。一人一人、心底かけがえのない、大切な子どもたちだと感じた。おそらくこれから私は、彼らの中にいる「怪獣たち」とドラマを通して格闘しながら、彼らの「すべて」と全身全霊で関わっていくことになるだろう。

セッション一回目、開始！

お試しセッションでドラマセラピーの楽しさを知っているマツオ、イチゴ、リンゴは、本セッションを受けるメンバーとして

選ばれたことが、とても嬉しい様子だった。スギオは、マツオから聞いていたようで、どちらかと言えば楽しみにしている様子だが、アンズは、迷惑がっているのがわかる。もちろん、二週間に一回、夕飯後に5人だけ「特別な活動」に行くことを許され、終わってから何とお菓子を食べ、紙芝居を読んでもらえるというのは、他の多くの子どもたちに羨ましがられることではあるので、この「特権」については、悪い気はしていないようだ。しかし自分を表現する(しかもドラマで演じる)ことを要求されるのはごめんだ！と感じているようだった。

まずセッションを受ける際、守ってほしい「お約束」を、とにかく徹底して伝えた。特に始めの二つは彼らには難しいルールだろうが、これは、今後ずっと毎回セッションが始まる前に復唱して確認させ続けることで、より効果的なものにする助けとした。

お約束

- 1, 他の人が演じているときは静かにし、みんなで一緒にやるときは、協力し合う。
- 2, 身体で実際にアタックしない。(やるときは、「ふり」だけ)
- 3, 楽しもう！ スッキリ良い気分になろう！

私たち7人のグループを見守ってくれるマスコットとして、なぜか気に入ってシンガポールの動物園で手に入れたオウムのパペットを持って行った。真っ赤な身体に大きな黄色のくちばし。カラフルな羽。目はキョロキョロしていて、チョコボールの宣

伝に出てくる鳥に似ている。ドラマに使うこともあるだろうし、たとえ使わなくても、毎回この鳥を見ると「ドラマセラピーが始まるんだ！」と、子どもたちの心のモードが非日常の世界へ変われるように、セッションの象徴としての役を果たしてもらおうと、グランドピアノの上に座らせた。「名前を決めよう」と提案したが、みんなが、てんでばらばらの自分の言いたいことを言っているだけでなかなか決まらない。結局、マツオの提案した「チュッチュ」にする。全員のコンセンサスはとれていない。この時点では、私が何を言っても、何をやるうとしても、ただみんな勝手に騒いだりふざけたりしているのみ…。

子どもと子犬のドラマ

いよいよドラマの設定をし始める。まず子どもと犬の絵を見せた。子どもは部屋の隅で壁に顔をつけているので、後ろ向きになっていて、顔は見えない。その後ろに、子どもを心配しているような顔をした子犬がちょこんと座っている。この絵を見て、どんな状況か自由に想像し、ドラマをするのだ。一人ずつ、相手役は必ず私が演じる。どちらが子ども役か犬役かは、演じる子どもに決めさせる。

小学校などで行うと、「お母さんに叱られた子どもを犬が慰めている」というような、いわゆる子どもらしいストーリーが出てくるのが一般的だが、今回はそのようなアイデアは出ず、しょっぱなから「個性的な」ドラマが続いた。

リンゴ(犬)と私(男の子)

「家を壊して遠くのマンションに引っ越す！」と犬が主張するので、男の子は、今

住んでいる家を壊した。犬も、見ている観客（他の子どもたち）も喜ぶ。私がいうことを聞いてくれるのが嬉しいのだろうが、それ以上に壊すという行為が気持ち良いのだ。現実生活で子どもが何かを「壊す」行為は基本的に認めてもらえないし、当然怒られるので、このように受容されること自体が、非常に嬉しいようだ。もちろん、架空の設定だからこそドラマセラピストは受け入れて、やってあげることができるのだが、これはドラマの大きなメリットの一つである。

家の破壊のあと、さあ、引っ越そうと男の子が言っても、犬は、ずっと床にぐずぐずして立とうとしない。犬は「おちんちんと言わなきゃダメ」としつつ私にいう。私はすぐに言う。それでも立とうとしないので、また言う。「二回も言わなくていいよ」と楽しそうに笑った。（当然、観客にもウケた。）要するに、どのくらい受け入れて、自分の望みを叶えてくれるか「お試し」をしているのだ。

このようなことばは、普段、子どもは遊びの中でふざけて言うことはよくあると思うが、大人が（特に「先生」のような立場の人が）何のわだかまりもなく、一緒になって言うのは、意外で面白いらしい。私は、何でも受け入れるよ、という顔を彼らに見せる。またドラマの中では実際にぶつたりしなければ、何をしても言っても基本的には自由と伝えてあるので、そのこととの矛盾を子どもが感じないように、当然、どのようなことばやアクションも「基本的には」平等に扱うようにしている。

さてやっと荷物をまとめて二人で引っ越しの作業になるが、一緒にドラマをしているというより、リンゴが私に「ああしろ、

こうしろ」と命令し、それに従って私が一人で動いている感じになった。引っ越しが完了し、私（男の子）は疲れたので、犬に向かって「疲れたからもう寝よう。そうだ、お母さんも一緒に。」と言ったらニコニコしていたリンゴが豹変し、とても不機嫌になった。金切り声でヒステリックに「お母さんは、い・な・い・の・お～っ！！」と怒鳴った。

私は、「あ、そうか。お母さんいないのか。犬と二人で住んでいたのね。」と合わせた。次におなかすいた、と男の子が言い、結局牛乳を買って来て飲む。犬は、床に寝たまま動かない。足の裏を男の子に向けて、そこから飲むというので、男の子は「足の裏、ちょっと臭いけど、ここから栄養補給ね」と言って足から飲ませる場面で終了した。

ドラマの枠組み(設定)を提供した上で、自由に即興をしてもらおうと、子どもたちは、まさにそのときの状態を反映させたり、自分の気持ちを投影させて表現する。それゆえに、普通の「お話しモード」でコミュニケーションをしてもわからない（わかりづらい）ことが、瞬時に手にとるようにわかる。私自身が相手役をしているので、相手の生（ナマ）の感情をストレートに受けとり、それを全身で感じる。ドラマを子どもたち同士でさせて客観的に見ても到底わからないことも、理解できることが多い。

リンゴは、お試しセッションのときは、もっと素直で子どもらしい部分が多かったが、今回は、イライラ気分や相手を支配したい・いじめたい感情が強くなっていて、随分ドラマの質が変わった。「何があったの?」と浩二さんに聞くと、（それまでは定期的に実家に帰る機会があったのだが）最近の家の状況で、母親と会えない状態だと

ということと、施設で一緒に暮らすグループの中に、リンゴより年下の子どもが入所してきて、職員たちの注目がその子どもに行っているということだった。

いづれにしても、「明代さん(私をそう呼ぶようにと子どもたちに言っている)とリンゴ」という現実人生の関係ではなく、ドラマの「男の子と犬」として、感情をぶつけたり受け入れられたりという相互交流の中で、子どもが言語化、意識化できない葛藤なども、瞬時に浮上してくるので、それらを扱うことが可能になる、というところがポイントである。

イチゴ(犬)と私(女の子)

お母さんに怒られて泣いている、という設定になった。そこで私は慰めてくれるかなと、少し期待したが、甘かった・・・。

犬は、いきなり「ボケ!!泣くんじゃねー!」と怒鳴ったのだ。それで女の子が、もっと泣くと、犬はケタケタ笑った。ちょっとヒステリックで、ざまあ見る、いい気味、という雰囲気である。その後、なぜか女の子は死んだことになって、その肉をはぎ取られ、食べられた。

マツオ(犬)と私(女の子)

初めに、犬は、おら～～!!と大声でどなり、すごく激しい不良少年のようなことばを吐いた。女の子が、ご飯食べる?一緒に寝る?といろいろ聞いても全てにイヤだ!と反抗する。前のセッションで、ドラマが少しも続かず、私とも対峙できずに逃げ回っていた彼を思うと、このように、正面切って反抗するドラマを一定時間続けられるということ自体、大きな進歩だった。女の子に「家を壊して死ね!」と言うので

(このあたりは、前の子どもたちのパターンを真似ているのだろうが、それにしても、そこにハマるといことは、みんながそのような感情を持っていて、それをドラマの中で受け入れてくれる人に吐きだしているのだろう。)一緒に家を壊そうと誘ったが、イヤだと断られた。そこで私が一人で言われた通りに壊すのを喜んで見ていたが、「一人でやって嬉しい?」などと言う。何とも複雑な犬の心情が窺える。その後「死ね!」と言ったが、リンゴやイチゴと違って気弱な響きだった。本当は、あまり言いたくないことばなのだろう。一応は受け入れて、ドラマを終わらせようと思い、「はい、死んだ」と応えた。マツオのエネルギーが、だんだんしぼんできた様子と、つまらない雰囲気がよく伝わってきた。

アメリカのドラマセラピスト、アリス・フォレスターらの報告によると、被虐待児に行った初期セッションのロールプレイで、子どもはドラマセラピストに、弱くて侮辱されたり、人格を傷つけられる、無力な役をさせると述べている。ある事例で、子どもはドラマの中でセラピストを撃ち殺したり、細かく切り刻んで食べたりしたという。私もまったく同様の体験をしてきている。

このような行為の意味を、フォレスターらは、「子どもは、虐待され、屈辱を受けたときどう感じたかを、また制御不能な感覚や恐れなどの感情をセラピストに教えていたのだ」と気づいたそう。この気づきは、ドラマで「攻撃」され続ける私を多いに助けてくれた。

浩二さん(女の子)と私(犬)

3人が、ネガティブな感情を、犬や子ど

もの役に乘せて表現したことは、非常に良かったと思う。しかしマツオのような場合、本当はもっと違った表現をさせたいと感じる。すっきりできずにいるのがよくわかるからだ。そこで、少し方向が変わるかもしれないと期待して、今度は「まともな」ドラマをこちらから投げかけてみよう、と、浩二さんと演じて見せた。探している人形(オウムのチュッチュを使った)を犬がつけてハッピーエンド、というストーリーにした。でも子どもたちはまったく興味を示さなかった。

スギオ

スギオは今回初めてで、私との即興ドラマはあまりうまく行かなかった。ドラマを展開できずに短時間で逃げてしまう。逃げ方が前のマツオのときと似ていた。

世界一怖いお母さん

ここでリンゴからのリクエストがくる。子どもが自発的に演じたいと、設定や役をリクエストしてくるのは、大きな意味を持つ。前回の「世界一怖いお母さん」とのドラマが面白かったと見え、私にやってほしいと言う。

母(私) 勉強しなさい!

リンゴ 泥棒になるからいいよ。

母 泥棒だって勉強しないと成れないよ。

リンゴ (部屋のどこかから、ノートを見つけて持ってきて)お前のノートを見てみるよ。

母 あら、これ私の昔のノートじゃない!お母さん0点なのばれちゃったわ。

(これは、リンゴが筋書きを作って、私に言わせたセリフである)

リンゴ 「私は世界一貧乏で算数が0点のババアです」って、書け! そう言え!

母 (その通りに言う)

超怖いお父さん

イチゴもリクエストを出してきた。後半で、父(私)が怖いままでドラマを終わらせたくないと思い、そっと肩に手をかけて、「お父さんがこんなに怖いのは、本当はイチゴへの愛情の裏返しなんだよ。お前を思っているんだよ。」と試みてみた。が、時期尚早だったようだ。こわーい、憎たらしい感じでピシャッと怒鳴られてしまった。

「なれなれしく触ってんじゃねーよ!ブタッ!!」

アンズ

アンズは、他の子どものドラマを見るのはOKでも、自分がやるのはイヤだ、一人でドラマに出るのはイヤだと言って拒否した。もちろん、無理強いはいらない。この場にいることはイヤではないようなので、良かった。

五つ子と超怖いお母さん

その後、みんな一緒にドラマをやろうということになった。5人の子どもたちは五つ子で、明代さんが超怖いお母さんね、とみんなが設定した。一人ずつだとうまく行かないスギオもアンズも、何と参加して、私に口答えのせりふ言っているではないか!

「宿題やったの? やりなさい!」と怒る母に「お金くれたら勉強してやってもいいんだ」などと誰かが言っていたが、そのうち、みんな競って私に「宿題」を見せるようになった。

そこで私は、「一人ずつ何がほしい?」とリクエストを聞いて、宿題したご褒美にプレゼントをすることにした。たとえば、イチゴがほしいのは猿、マツオは鳥、スギオはドラえもん、とのことで買ってあげた。今まで私にもドラマにも心をひらかない様子だったアンズが、「全部ほしい」と言う。

「みんな公平にしないといけないからね、一個だけ買ってあげる、一個言いなさい。」と伝えても、アンズはもう一度「全部」と言う。とても大事な表現をしてくれたので、全部あげたいところだった。しかし、個人セッションではなく、みんなを平等に扱うことが、特に初回では大事なので、公平を保つことにする。「一個だけ。」

するとアンズは、「浩二」と答えた。私の意図や立場をよく理解し、さらに他の子どもとは少し違う「贅沢な」プレゼントを要求したのだ。浩二さんは、子どもたちに人気の職員で、その人をもらうことができれば一個でも「全部」くらいの値打ちがあると考えたのだろう。もちろん、プレゼントした。

* * *
* * *

最後に全体の感想を聞くと、みんな「楽しかったです」と答えた。(子どもたちが帰ったあとで、浩二さんに「あれ、お世辞じゃないわよね」と聞いてみると、「そういうお世辞は、一番言わない子どもたちです。」と、笑っていた。)確かに本当に楽しかった、という感じが伝わってきていた。特に最後の五つ子のドラマが楽しかったようだ。

ドラマ後、気持ちをクールダウンさせるために、部屋を暗くして、想像で自分の好

きな世界にいくワークを行った。なかなか「想像する」ことができない彼ら。私がどんな世界に行ったか聞いてみると、本当にイメージしたことでなく、ふざけて答えを言っている。うんこの世界、おちんちんの世界など…。

前半、一人ずつのドラマでは、暴力的・攻撃的なストーリーが多かった。しかし、これはみんなが私を信頼し、その場が安全だと感じてくれた証拠でもある。内容的には、相手役として気分が良いものばかりではないが、彼らにとっては非常に良いドラマになったと評価できる。

さらに、その後みんなで一緒のドラマになったときは、「超怖いお母さん」に甘えることができ、プレゼントまでもらうというハッピーエンドができた。

かなり良い「船出」だった。

次号に続く)